

史料集（史料24・26・27以外は倉敷市総務課歴史資料整備室所蔵）

江戸初期の高瀬舟史料

史料1 大淵九郎兵衛書状（守屋家文書別2・62・1）

尚々、御六ヶ敷可有御座候へ共、一入頼申候、不参候へハ成不申候間、申迄も無之候と共、かならずく頼申候、以上

態一筆申入候、今朝も申遣し候はまくり之事、五俵と申遣候へ共、大はまくり式俵おしこみ五俵、合七俵、今晚此者二御越候て可被下候、松山方態人を越申候故、早々申遣候、明朝ハ夜ノ内ニたかセ上り候故、今晚不参候へハはつ二あひ不申候、若七俵無之候ハ、五俵計成共今晚御越可被下候、代銀御書付ケ可被下候、源右衛門殿へ渡シ置申候間、別払可申候、旦那？方態人参候故、今晚かならずく御かち入候、恐惶謹言

極月廿三日

水谷太郎左衛門内

大淵九郎兵衛（花押）

乙嶋左平次様

参

酒津く東城・松山の舟運と鉄取引

史料2 差入申一札之事（中洲村守屋家文書2・66）

差入申一札之事

一石川様御米三拾八俵

右者、去ル十月廿一日右御米相渡御請取書貰ひ請候所、舟頭石右衛門紙入川江取落、御米請取書共失ひ申候、全同人不調法仕候二付、御断申上、再請取書被成下之段、忝存候、向後若請取出候共可為反古、其元江御心配掛申間敷候、為後日差入申上札依而如件

松山舟持河内屋

安政四年 善之助（印「松山本町 河内屋」）

巳十二月

酒津岡野屋

甚兵衛殿

※松山の舟持河内屋に属する船頭が、酒津で岡野屋に米38俵を渡し受領証をもらったものの、誤って紙入れごと川へ落としなくしてしまった。そこで受領証を再発行してもらい、以前の受領証がもしみつかったもそれは廃棄処分とし迷惑をかけることを誓約したもの。

史料3 酒津河岸問屋相論覚（中洲村守屋家文書）

一去辰二月y当正月迄佐平二年番之所、甚兵衛へ一切相頼申候、然ル所忠兵衛y荒葎荷物之分支配致させ度旨相頼出候二付、佐平治y甚兵衛へ掛合、何卒荒葎之分支忠兵衛へ譲り呉候様相頼候二付、其意二任せ承知致候所、其旨左平次y忠兵衛へ掛合候処、同人申事荒葎ハ別段ニ致其外諸荷物半方支配致度旨申之、左平次案内たし左様之義二者難相成様申候得者、忠兵衛申事甚兵衛■之義者

約請不申、尚又甚兵衛□□一切取用ひ不申、不承知申立候、左候而者忠兵衛y甚兵衛へ難題申掛甚迷惑難渋いたし候、又々忠兵衛申候者、外諸荷物半方是非く相頼度旨申出候、又者其砌甚兵衛職分年番y御取あけ可被成か、又ハ此方y取あけ可申哉、其段承度旨、忠兵衛y左平次江掛合申候、此義も年番へ甚兵衛y掛合置候へ共、其俣ニ相成□候、

一砂糖大樽尅挺、浜せん・蔵敷共式分御掛物、甚兵衛取来り候処、忠兵衛ニ而者三分六厘、三分四厘取申候、是ニ付先方y相尋も御座候、此義も年番江掛合置候得共、其俣□□成□

一殿様之荷物浜銭之義、尅荷分九厘ニ□所、尅分八厘も忠兵衛取申候、余り多分之掛り物故、荷主y年番仲間江及掛合候故、年番y忠□□へ掛合候処、全然□答□□杯も申立候へ共、仲間中之所其俣ニ相成□候、

一御用炭割木之義、去ル辰十一月六日昼八つ時着船、直ニ船頭浅吉より忠兵衛へ相届ケ荷揚致候□□も晩方迄忠兵衛私用、荷物附出シ之義有之、尚又六日之夕雨天ニ相成り、七日ハ大ふり、七日之極晩迄河原ニ其俣ニすて置候由、殊ニ御荷物ぬれニ相成候趣、船頭y承候、且又九日之昼、忠兵衛y書面ヲ以、御用御荷物差支ニ付、仲使共差留呉置候様申■候、尤仲使之者共買荷も御座候、夫ヲ忠兵衛y甚兵衛へ御用向差支ニ相成候様申掛候へ共、甚兵衛義ハ御用筋故他村牛馬・仲使迄相頼申候処、十日ニ御役場江忠兵衛y申出候ニ付、御村役人y御察当請申訳之義も御座候へ共、御用筋之事故恐入、御役人y御差凶ニ随ひ、忠兵衛へ引合候様被仰聞候ニ

付、早速忠兵衛へ罷越候筈之処、折節弥平太宅ニ罷居候ニ付、此所ニ而御聞可被下哉相尋候処、随分承度旨被申候ニ付、引合相断候処、忠兵衛相考返答可致様申候得共、何之返答も不致、直様年番江相届候由、右ニ付年番y承候□甚兵衛江のそけ呉候様忠兵衛y掛合、又者忠兵衛江同意致被呉候様掛合候、夫も出来不申候ハ□忠兵衛yのそく共致呉度旨申候、是も出来不申候ハ、

御上様へ出訴可致間、其段承知可致様、年番江蔵敷掛合申候、右之趣年番y甚兵衛へ申し候ニ付、甚兵衛得与相考候所、忠兵衛y御村役人江者偽り甚兵衛江者難題度々申掛候ニ付、年番左平次へ数度掛合置候へ共、事相分不申、菟角□□ヲ不得論立、甚兵衛甚迷惑難渋仕候間、甚兵衛江義年番消印之義双方共致呉候様被仰聞奉頼上候、

一已来甚兵衛名当テ荷物之義ハ、勝手次第可致旨、年番江相届ケ置申候、巨細之義口上ニ申上候、

史料4 平松益造書状（中洲村守屋家文書）

一筆啓上仕候、先以弥後壯健被成■候■候、（中略）誠ニ其後者申上訳無御座候、御無音■■■■■御高免可被下候、然者兼而当川筋為繁榮、■■■■備後鉄荷物下筋へ運送相成居申候分、此川筋へ多数御運送被成下候様、近来段々備後東城親類田辺新平へ手前相頼居候処、旧冬より備後奥筋鉄荷物多数運送相成可叶申候間、大二都合立■■■■候、然ル処此度鉄為替之儀ニ付、田辺新平乍心申談事御座候、御手前之■■■■当所かゝる■■■■合可存、此心ニ而少しも為■■■■出来不申候而、大

覚

(割印) 一鉄式拾八束(印)

東城徳納新平殿分

右之通、当方預り今日積下ケ可申奉致ケ処、舟都合不宜、四五日之内積下ケ可申候間、宜敷奉頼上候、以上

小倉

為三郎(印「備中田原」)

辰閏四月五日

岡野屋

甚兵衛殿

※辰年の閏四月＝慶応四年(明治元年)。

史料9 守屋甚兵衛あて小倉為三郎書状(中洲村守屋家文書2・62

・7)

「岡野屋 小倉

甚兵衛様 為三郎」

■安康可被成御座候、珍重奉存候、然者鉄為替之義、金主方被買込候訳も有之、老束二付老両余七つ御取組被成かたく使者之御談、尚先月廿九日御認メ御状到来、致承知候、内実西城尾道屋より秋印式両式分■売渡可致与申居候、鉄者印ハ同根ニ而も全く御上之鉄秋与ハ大ニ事違訳合、夫ハ追々相訳り可申、たとへ何程直段下り等御座候ても為替流杯御心馳者決而無御座候、可成者先約定之通、老■二付式両式分を替御心馳ニ相成度奉存候へ共、色々訳合使へ御談之由

二付、則証文■替差出候間、老束二付老両之積り御取組可被下、尤

玉しまへ百五拾五束当方考与ハ余分ニ松山方積下ケ有之趣、左走路へ者自然玉しまニ而右之分取組候へ者

貴家之方御減御頼可申も難計、此段も御合点可被下、尚委細ハ此ものより御聞取可被下候、先者右之段得御■度如此御座候、

頓首

壬四月五日

史料10 覚(中洲村守屋家文書2・64)

覚

三月廿一日方

一鉄拾束(印「引合」) 舟源吉

四月十三日

一同廿八束 舟留吉

同廿六日

一同拾五束 舟村蔵

閏四月朔日

一同廿五束 舟源吉

七拾八束当方より積下ケ被申

三月廿日方

一鉄百廿三束 松山大坂屋方積下ケ申

合鉄式百老束

一鉄三拾老束松山大坂屋預ケ被申

一同廿五束 当方預り申
惣合式百六拾束

右之通御引合せ可被下候、以上

小倉

為三郎（印「備中原」）

辰

閏四月五日

岡野屋

甚兵衛様

※史料3と同じ日、明治元年閏四月五日のものともみられる。

史料11 守屋甚兵衛あて徳納新平書状（中洲村守屋家文書2・62

・5）

「岡野屋

徳納

甚兵衛様

新平

貴下

一筆啓上仕候、先以御揃弥御壮栄被成御座、珍重御儀ニ奉存候、然者鉄為替之儀、田原為三郎通御頼申上候所、色々御心配御熟談被成下忝仕合奉存候、今般式百駄為替借用仕度飛脚兩人差出委細右為三郎方可申上候間、御渡可被下、尚跡鉄多数積下り申度候間、追々宜敷奉頼上候、先者右御挨拶旁御頼如斯ニ御座候、以上

徳納

四月廿九日

新平

岡野屋

甚兵衛様

史料12 平松益造書状（中洲村守屋家文書2・48・19）

然者、先日鉄為替御取組被成下候而、御頼被[■]鉄荷物出津仕候ハ、如何被成候旨、忝存候、右ニ付出荷之義申出候処、川之瀬・吹屋両所y引続出荷仕、余程着荷可成申候、尤段々荷物あまり、此度五百た丈ケ御取組被成候者、金高まし申候ニ付、又々人差上申候、[■][■][■]御頼申候荷物者東城鉄[■]候、[■][■][■]御頼被申候、委細之事ハ此光右衛門へ申聞差上候間、御[■][■][■]被下候て[■]御頼申候、右之段御頼上候、[■][■]

七月朔日 平松益造

岡野屋甚兵衛様

（追而書破損多く難読）

史料13 覚（中洲村守屋家文書2・48・17）

（包紙上書）

「辰七月十日

鉄為替手形

大坂屋入

覚

一小割鉄四百束也

此為替金四百両

右者私方買入荷物此元積下申候間、為替御取組御渡被下、慥ニ受取申候、已上

松山

辰七月九日 平松益造(印)

酒津

岡野屋甚兵衛殿

史料 14 旧中洲町墓碑録 (黒川清一氏寄贈文書64)

徳光院高鏡昌運居士 右漸夫婦之

松光院貞鏡妙運大姉 両親也

翁姓守屋諱義直称甚三郎葺庵其号也考曰甚兵衛勤儉興家翁亦能守家訓益勤儉以致豊富翁幼修武徳愛刀劍嗜好■嗜啜茶優遊自適■知寿之将尽也寿遂次明治三十八年乙巳三月十日享年七十有五葬之祖中洲之曲先榮之次翁為人温順謙讓実若虚犯而■校(後略)

明治三十八年七月 興讓館長 山下 崇撰

東備 難波 徹書

※岡野屋守屋甚兵衛は守屋甚三郎義直の父親で、「勤儉」にして家を興した人物とある。

明和の成羽川通船史料

史料 15 問屋御請合証文之事 (乙島守屋家文書別94-1)

問屋御請合証文之事

一 今度備後東城 y 成羽江川浚通船之義、御取立之由候ニ付、東城 y 御積下之諸荷物、川下問屋之義何卒私相勤申度段、萬屋庄兵衛殿を以段々御頼申候処、御承知之上東城江茂其御元 y 之仰遣、私方問屋御定被下、忝奉存候、然上者諸荷物随分念之入無沙汰無之様可仕候、

一 当地諸掛物之義ハ大略古来 y 之格置ヲ以別紙ニ書附掛御目候、右定之外内証請引堅致間鋪候、

一 大坂江御登シ荷物当地 y 成羽江積登候荷物少茂滞不申様相勤早速積登させ可申候、若舟中ニ而欠等茂有之候ハ、穿鑿仕御荷主方御損ニ不相成様可致候、

一 請込候荷物之内不限多少、万一紛失等茂有之候ハ、私方 y 相弁可申候、

一 元船之義、私方 y 作配可仕候、其内船頭方江御相对之品も御座候ハ、其段先達而可被仰遣、御差凶次第何れ成共為積可申候、尤私心底相叶不申船頭へ者、其時御断申、私存寄何れ成共宜敷船頭へつませ可申候、

一 玉嶋湊 y 大坂迄之間海上万一破船等有之、積荷物流失又者濡等出来候節者、玉嶋 y 播州室津迄之間者玉嶋積入問屋支配、室津 y 大坂迄者同所右荷物引請問屋中支配相成故、支配方 y 破船場所へ罷越、船法之通濟口相附候義、前々 y 玉嶋積入諸荷物格合御座候、尤船法之義者、大坂廻船御法相守、何方ニ而も同様取計有之義御座候故、右御法之通相定候之事、

一 玉嶋 y 室津迄之間、右破船為支配玉嶋問屋罷越候往来入用ハ、右同所問屋構先方逗留之間諸入用者御荷主方御構ニ相成候義、古格候故、此度右之通相究候之事、

一 御荷物之内当地ニ而売捌候ものハ随分出精仕、御荷主方御為成候様、相働可申候、其内外問屋江被遣御掛被成度思召者、私引受候後、何れ成共御差凶次第相渡可申候、勿論掛物ニ重ニ成様ニハ決而致間敷候、

一 当地ニ而御買物塩杯之類随分下直ニ付候様、相働可申候、其内外ニ而御調被成度思召候節者、御勝手次第何れニ而も御買可被成候、御調之後私方 y 成羽迄送状を以積登可申候、

一 為替銀御入用之節者、早速調達可仕、惣而御用事等之義、随分世話可仕候、

一 其御元 y 送状無之抜荷かましく物見聞出し候者、其旨早速可申遣候、且又積合之訳相知候分格別一艘分之荷物ニ船頭方ニ而若はせ荷等致積下候者、吟味仕其趣可申遣候、千一油断いたし外 y 相知候者私方可為無念候、

一 御荷物請取送之切手、念之入相認、僂末無之様可致候、

一 荷物ハ勿論船ともニ又串・一ノ口 y 下ニ而自然故障之義も出来致候ハ、早速私罷出、訳相立申候而御障不相成様可致候、

右之通、御請合申所相違無御座候、私方何角支配之中、若御心叶不申義も御座候ハ、其旨無御用捨可被仰聞候、兎角相嗜何角念之入相勤可申候、為後日請人奥印請合証文依而如件

明和四年 玉嶋乙嶋屋

亥三月 政平

成羽増真屋

民八郎殿

一札之事

一 此度東城 y 新ニ荷物出候ニ付、当所ニ而御引請問屋之義、段々以御出精御手前様へ相究候由、私共働も相増候様罷出、殊鉄之義ハ前々 y 私共手相掛不申候処、此度其元様へ御引請被成候分ハ、鉄ニも中使相掛候様被成下、忝仕合奉存候、然上者出荷物水上蔵出シ入、万事手掛候義、随分念入聊僂末不相成様可仕候、

一 町内ニ而御同様成急荷物手掛居申候者、右御引請荷物參候節ハ御差支ニ不相成候様可仕候、

一 荷物水上尚又蔵ニ有之候節、若町内出火御座候者、彼町者不及申、私共町内ニ御座候共手分いたし、荷物有之場所へ相かため可申候、若僂抹ニ而紛失惣而私共手掛候内荷物致不足候者、中間と仕急度吟味仕相知レ不申候者中間一統と致相弁可申候、

一 御引請荷物ニ付、御手前様 y 被仰聞候義、御同様之事候共御差凶次第御請合申、承知可仕候、若中間中不同心之者も御座候者、中間中申談不埒之筋ニ存候ハ、中間相除一統仕間敷候、其上相背御心叶不申候者、右荷物手掛候義御除被成候とも私共 y 一言聊申分仕間敷候、依而為後日一札如件

玉嶋中使

宗助 (印)

(中略)

治助 (印)

明和四歳

亥三月

乙嶋屋

政平殿

史料17 東城荷主名前 (乙島守屋家文書別 9-4-23)

「東城荷主名前」

丸山屋茂四郎

岸屋甚八

中村屋茂右衛門

木綿屋弥右衛門

三木屋平兵衛

大津屋伝吉

名田屋平八

兵後屋与左衛門

同延蔵

史料18 勘定所触状 (乙島守屋家文書別 9-4-26-3)

備後東城 y 当地江高瀬通船有之ニ付、右荷物此元ニ而致船繼、玉嶋ニ而之問屋御用達乙島屋政平方江相送筈ニ候、右ニ付当地 y 大坂登せ商売荷物之分是迄玉嶋ニ而外之江送り来り候共、向後乙島屋方江相送候様ニ可致候、夫共右同所へ遣候而、不勝手ニも相成候ハ、可為相对次第事、

右之趣、村方町方向荷物ニ不限、大坂取引有之者共不残様ニ可触知者也

亥

閏九月 御勘定所

村々庄屋

年寄中

史料19 川筋一件於川部申合書付 (倉敷村小野家文書 97-11-1)

川筋一件於川部申合書付

一 備後国奴可郡東城村 y 当国川上郡成羽村 y 三里川上田原と申所迄通船ため川浚取懸り候由、相聞候ニ付、川下故障ニも可相成哉不寄敷候、山北井組 y 見届遣候而、以其趣川筋并井組当十三日於川辺村ニ致会合、下方故障ニも可相成哉勘談之趣左之通、

一 東城 y 田原迄道法凡八里之間、通船難成巖石五十余ヶ所、勿論如砂留之有来之場所切抜キ申由ニ相聞候、左候ハ、土砂夥敷追々流落、川下埋り近年益及難渋可申哉、

一 及承候所、右八里之内ハ通船ハ不及申是迄人馬之通も難、通船相叶候得ハ竹木并炭薪等人俣ニ積下シ山林荒果可申敷与相聞候、然ル時ハ水氣之保も不宜、用水取請之節谷々之下乘り悪敷、自然と川下井水懸り用水不足可致哉と被存候、

一 八里之間五十余ヶ所之巖石ヲ切抜川並小大水吐能相成候ハ、大雨之節ハ川下降溜海面に吐出し不申中湛合ニ成、益々出水之節致満水川下御料領川除堤等方相叶申間敷哉と被存候、

右之通之品々御座候、其辺川筋并井組御衆中御急談之上故障之趣ニ被思召候ハ、近々山南山北御一同之大会相催、御熟談及度奉存候、此義御普請ニも取懸り罷有候、殊更御互ニ時節柄追而多用相成候得者、延々ニも難相成、何分日限被仰合被仰候哉、次第御会合可申候、以上

史料20 成羽川通船につき聞合書上 (倉敷村小野家文書 97-11-3)

湛井川奥此度通船之企仕候由御料領 y 聞合ニ罷出承合候趣左書上申候

一 玉島 y 川上郡東油野村之内田原迄道法凡十四里之間往古 y 通船仕来申候、

一 田原 y 備後国奴可郡東城迄川筋凡八里之間川並悪敷只今迄船通路難成所、此度親規ニ船通仕候由、御普請所瀬数凡五拾余ヶ所御座候内、西油野村之内かさかみ之瀬、西山村之内花園之瀬、右式ヶ所只今御普請出来懸リ申ニ付、立寄見合申候所、少々岩抔取除ヶ瀬方等堀分ヶ御座候へ共、平生之川船ハ通兼申様ニ相見申候、
一 石川堀八里之内、備中川上郡東油野村西山村平川村ハ笠岡御代官所

一 備後国神石郡有木村、小野村、豊松村ハ上下ノ御代官所

一 同国奴可郡新免村ハ奥平大膳大夫様御領分

一 同国同郡久代村、川東村、東城ハ広島御領分

一 川堀願主東城前大坂屋清右衛門、七日市屋平右衛門、中屋九右衛門、角屋多七、右四人之者頭取ニ而願差上、以後者問屋等仕候由御座候、

一 右御普請諸入用之銀主ハ広島御城下茶屋七右衛門、御同領加茂村惣左衛門、兩人請込、御普請出来之後者東城ニ而船株三拾艘と相極、追年運上銀ヲ取申由相聞申候、

一 右御普請所之内ニ成羽御領分ハ無御座候得共、東城 y 通船継場ニ罷成、御益ニも相成申ニ付、川堀ニ御助夫被遣候由ニ而御座候、
一 御料御私領山林夥敷儀ニ而、炭薪并鉄山多ク、勿論商荷等只今迄ハ新見・松山川江出候所、此以後東城 y 通船罷成候得ハ、殊之外勝手宜御座候由相聞申候、尤右之趣ニ而新見松山杯ハ商用次第ニ

無数罷成可申と下ノ方殊之外不勝手之様子ニ風聞仕候、

一 東城川奥ニ而外川江落候谷水切向申風聞御座候ニ付、段々念入聞合申候所、左様成儀ハ決而無御座様子ニ相聞申候得共、無心元奉存候、東城 y 五六里計川奥広島御領備後国三坂野村迄参込及見申候所、外谷水切向候場所ハ相見へ不申候、尤少々ニ而も川水増申様成義御座候得者、成羽御領松山御領村々 y 其分ニ而指置不申様ニ相聞申候、

右之趣、湛井郷中惣代与ノ蒔田伊勢守様御知行所上林村庄屋幸左衛門、御同領湛井樋守金井戸村治右衛門、私共一所ニ罷出、右川筋村々庄屋其外在家江立寄、一宿等仕得与見聞仕候品、委細書上申候、以上

柿木名主

戌十月 用介

小田川の高瀬舟

史料21 浦手形之事(乙島守屋家文書 元文三年午四月諸御用留帳)

浦手形之事

一 伊東伊豆頭様御領分下道郡下二万村船主源次郎・高瀬船上乗船頭・水主、以上三人乗ニ而、右伊東伊豆頭様御年貢米玉嶋御蔵本江積廻シ申由ニ而、十月二日之七つ時分ニ浅口郡乙嶋村やふ海表之そわいに乗掛ケ船破損仕候を、早速当村獵船式艘乗出シ、御米四拾二俵積揚、俵数相改浜江揚置、高瀬船者右式艘之獵船ニ而砂場江こき付、夜中ニ罷成候間、上乘・船頭・水主ニ村方も番人相添置、船頭源次郎荷物并舟道具等相尋、口上之通遂吟味、高瀬船諸道具着

類除之取揚候、御米四拾貳俵之荷物之儀者、御定之通分一取之、相殘御米高瀬船諸道具着類等、上乘文左衛門・船頭源次郎・水主三助江相渡、則請取手形此方江取置申候、為後日浦手形、仍而如件

浅口郡乙嶋村庄屋

享保十三年申十月 守屋伝次郎

同村年寄

惣兵衛

同

与三左衛門

下道郡下式万村御庄屋

鳥羽曾右衛門殿

同村年寄

八郎右衛門殿

同

十右衛門殿

右前書之通、遂吟味紛無之候、以上

松平豊後守赤崎陣屋手先

山田和兵衛

高瀬舟の海上運航

史料22 林弥之吉病死始末書 (旧中洲村役場文書22-3-1庶務

諸願伺届綴)

父弥之吉病死始末書

備中国川上郡手庄村大字吉木

三十四番邸平民林善吉父

林弥之吉

六十六年

私義平素高瀬船乗稼専務ニテ明治廿三年九月十三日高瀬船炭積入、父弥之吉為弟安太郎・自分ト三名乗組ニテ自村ヲ発船シ、同月十六日香川県讃岐国丸龜入港、同港間屋備後屋トテ売捌、同年同月廿一日日本県窪屋郡中洲村大字水江字本田高梁川々岸着船シ、午後六時頃ニ父弥之吉同所ニ上陸シ船ニ帰シ息遣ヒ甚苦シキヲ■依テ其瘧体ニ尋問スルニ、曩ニ上陸セシ際ニ下痢一回アリ、船ニ帰スルモ気分甚悪ク四肢タイク趣、同人ハ平生病氣ノ持病有之時四肢按摩手ヲ好ムモノニ付、当時按摩スルヲ宜トス故ニ、某介抱ヲナシ、当日午前四時頃舟中ニテ下痢一回アリ、同七時頃帰村セシ事ヲ希望スルニ付、同所発船シ、高梁川上登砌、同村同字字保木舟中ニ於テ十時頃下痢一回、追々息遣■急ニシテ苦シミ躰ニ付、同所■ニ着船シ折節、自村林平吉ナルモノ出逢幸ヒ、同人ヲシテ窪屋郡中洲村大字水江親族藤田守太郎ヘ父病氣ノ旨ヲ報知、同人ヲシテ浅口郡甲内村大字西原医師島瀬秀納ニ診察ヲ求ム、終ニ父弥之吉ハ死去セシ居ルト承ル、驚入不得止、死後虎列刺病ト檢按セラレ、御■規ノ届書ヲ得テ、御役場ヘ藤田守太郎ヲ以テ(この間綴じ目で行ほど脱カ)一時頃飲水ヲ望ムニ付、高梁川上流水ヲ与ヘタリ、瀉痢物ハ古継ニ包取■シ、曾テ水瀬ヘ下痢物投入セシ事決テ無之、旅行帰途困難仕居申候間、御■規通り御取計被成下度、且御取扱上ニ於テ毛頭苦情申立間敷、始末開述仕候也、

備中国川上郡手庄村大字吉木

三十四番邸

明治廿三年九月廿三日

林善吉（印）

午後三時五分

窪屋郡中洲村長藤野宇一殿

高瀬通しと一ノ口水門

史料23 一札之事（乙島守屋家文書G・3・14）

一札之事

一其御領分水江村一ノ口水筋通船之儀、松山船之分者同所船問屋
方手札船頭江相渡、其外松山領之内日羽村・種井村・下倉村、右三
ヶ村者其村之庄屋方之手札、通船之度□水江村坪井藤左衛門殿江
船頭方持参致置候、札数右藤左衛門殿方拙者方江請取、壹ヶ年之
内七月・十二月両度ニ致勘定、切手銭無滞取立、御渡可申候、尤
後々ニ至候而も此証文御用可被成候、為後証一札仍而如件

明和元年 松山領玉島村庄屋

申十二月 松田九郎左衛門（印）

亀山御領玉島村庄屋

守屋太平次殿

御同領水江村庄屋

坪井藤左衛門殿

史料24 願上げ奉り候口上の覚（『船穂町誌』所収小野寛氏所蔵文書）

※抄出

願上げ奉り候口上の覚

上船尾村御庄屋坪井茂右衛門死去致され候に付、跡役勤むべき者

三四人も願出で候様、仰せ付けられ候、上船尾村の内、吟味仕り三人書き上げ申し候、（中略）困窮の百姓共義に御座候へば、諸色物入り等無き様に願ひ奉り候、高瀬通の川筋に御庄屋御座なく候ては、御年貢米津出し其外不勝手に御座候間、最も寄りよき村中に御庄屋役仰せ付けられ候様に、偏へに願ひ上げ奉り候、

茂七郎（中略）

半兵衛（中略）

小野五郎兵衛（中略）

一只今まで上船尾村御蔵水江村遠くに御座候へば、御年貢米持ち寄り駄賃一駄に付米一升余も掛り、下船尾村御蔵にては米五合、所々により三合も掛り申し候、津出しの銭上船尾村にては八文、下船尾にては六文五厘にて相済み候へば、小高無高の者までも請負ひ作など仕り候小百姓共、殊の外不勝手に御座候、近年困窮の百姓共儀に御座候へば、御慈悲を以て御年貢米最寄能く、川筋にて滞りなく御上納仕りたく右御歎き申し上げ候、

（後略）

史料25 通船開始ニ関スル諮問案（船穂公民館から移管文書119、

2・5の1ノ口組合ニ関スル条例諸規定綴）

通船開始ニ関スル諮問案

船穂村大字水江字一ノ口水門ヨリ玉島港ニ通スル通船ノ挙ハ、明治八年ニ於テ再興シ、八年ヨリ向フ十五ヶ年間手数料ヲ徴収シ通船ヲ為シ来リシ処、其十五ヶ年即チ去ル明治二十二年ニ於テ満期トナリ、其後通船中絶シ、運輸交通不便不尠ニ付、今般更ニ左ノ方法ヲ

以テ一ノ口組合及玉島町ト協議ノ上、通船ヲ開始スルモノトス

第一条 船穂村外二ヶ町村一ノ口組合ハ運輸便利ノ為メ船穂村大字水江字一ノ口以下長尾村ヲ経テ玉島港ニ達スル水路ニ依リ、舟筏ノ交通ヲ開始ス

第二条 前条水路ノ内一ノ口組合所属区域内ノ費用ハ同組合ノ負担トシ、玉島町大字玉島所属区域内ノ費用ハ同町ノ負担トス

但、水門開閉及手数料徴収ノ費用ハ此限りニアラズ

第三条 一ノ口組合ハ船穂村大字水江字一ノ口水門及ヒ玉島町大字玉島海岸船通シ水門通過ノ舟筏各壹艘ニ付、手数料金參拾錢ヲ徴収ス

第四条 玉島町大字玉島ハ一ノ口組合費分担外ニ付、前条手数料ノ内第二条但書ノ費用ヲ引去リ、残余ノ金額四分の一ヲ玉島町ヘ分与スルモノトス

第五条 第三条ノ手数料徴収ニ付テハ、一ノ口組合条例ヲ設クルモノトス

第六条 近年通船中絶シ運輸ノ便ヲ欠キ、且貨物需用等ニ於テモ不便不少ニ依リ、此際速ニ通船ヲ開始スルモノトス

第七条 前条ニ依リ、此際通船ヲ開始スルモ第五条ノ手数料ニ關スル条例ノ許可ヲ請クル迄ハ手数料ヲ徴収セサルモノトス

史料 26 岡山県浅口郡船穂村外二箇町村一ノ口組合通船使用料条例ヲ設ク

条例第 号

岡山県浅口郡船穂村外二ヶ町村一ノ口組合通船使用料 条例

第一条 本組合ニ於テ浅口郡船穂村大字水江字一ノ口水門及同郡玉島

町大字玉島船通水門ヲ通過スル舟筏ニ対シ水門開閉ノ為メ此条例ニ依リ使用料ヲ徴収ス但本組合並本郡玉島町外二ヶ町村組合及該組合内各町村ノ事務ノ為メニ要スル舟筏ニ対シテハ使用料ヲ徴収セス

第二条 使用料ハ舟筏各壹艘ニ金參拾錢トス

第三条 使用料ヲ完納セサル舟筏ハ第一条ノ水門ヲ通過スルコトヲ許サス但同条但書ノ事務ノ為メニスルモノハ此限ニアラス

理由書

本組合ニ於テ通船使用料条例ヲ設クルノ議決ヲナシタルハ本県上房郡高梁地方及本郡玉島港ノ間互ニ相輸送スル薪炭鉄材肥料等ヲ搭載シテ往来スル船舟竹木筏等其數夥多ニシテ本水路ハ高梁川ヲ流下シ海ヲ廻リテ玉島港ニ入ルモノナルモ該川底ハ土砂埋堆シ且海路ハ暴風ノ虞アリテ往来ノ不便不尠ナカラス茲ニ本組合ノ用水路ニ依レハ通過ノ路程及日子ヲ減シ且往来容易ニシテ前陳彼是交通ノ便利甚タ大ナリ依テ往時之レカ通路ヲ開始シ手数料ヲ徴収シ舟筏ヲ通過セシメタル慣例アリ然ルニ此水路ハ高梁川ヨリ分派セルモノニシテ用水引用ノ外常ニ水門ヲ開放セス其舟筏ノ通過ニ際シ特ニ水門ノ開閉ヲ要スルニ依リ本水門通過ノ舟筏ニ対シ使用料ヲ徴収セントスル所以ナリ

(公文類聚第二十三編・明治三十二年第七卷政綱七ノ国立公文書館蔵)

史料 27 「江木鰐水日記」明治七年三月条 (大日本古記録『江木鰐水

日記』下) ※抄出

十六日、雨、衝雨遊水江村一之口水門、

(中略)

十八日、小野家蔵懷素之書請跋、跋之曰、(中略)

水江村字一ノ口水門、玉島ヨリ二里、上成ヨリ三千五百間、二百年前
二開、二十年不通、一年二千五百、日二十四艘、八月ヨリ二月迄二千
五百舟通、一匁、樋門ノハ、八尺、高瀬ハ、六尺、三四十石水ニ由、
十年前ヨリ土沙埋リ、本川高、内川低、々事一丈ナリ、水一丈高ケレ
ハ、毎年八月、灌漑無用ノ後、通川舟千五百艘、至二千艘、至二月而
已、樋門之稅一匁、導者文兵衛云、增至十匁、人猶通行、何哉、以便
近也、從之出于海、々口待潮、而後入玉島、若西風不可進、待其定、
一二日、出日不可知、

(中略)

十七日、朝發小野、入玉島、(中略)乃訪妹尾一三郎、語之以水江水
間可通舟之策、本川沙土淤塞、高低僅七尺、一間一尺而已、二十間後
用阿墨一樋門、則玉島之舟路可開也、談話數刻而去、(後略)

※明治四年四月十九日条(下巻二〇二頁)にも玉島の地勢が詳細に図入りで示
されている。

史料28 乍恐以書附奉願上候 (諸家文書)

乍恐以書附奉願上候

柘植又左衛門御代官所

浅口郡

阿賀崎新田村

庄屋 東作

年寄

願人 友左衛門

百姓代

喜兵衛

当国松山川之内西川筋用水井口松平紀伊守様御領分浅口郡水江村地
内字一ノ口用水井組之義、前々ハ水江村・上船尾村・下船尾村・長尾
村・爪崎・阿賀新田村・柏島村・勇崎村・黒崎村外九ヶ村井組ニ御座
候処、井路筋埋用水行届不申ニ付、八十老年以前寅年方柏島村・勇崎
村・黒崎村三ヶ村ハ井組相離、右三ヶ村之用水掛り高九百石余阿賀
崎新田村江引請、当時村高式千三拾壹石式斗四升余之村方ニ御座候
処、井組諸入用ハ式千九百九拾石余之割合ニ差出上郷と二日二夜宛
番水を以引取申候、然ル所年々大川筋埋候故、一ノ口水門根板ヲ揚
候義相成不申、依之大川者満水ニ而茂水門江引入候水無数、其上用
水井路夥敷埋り候ニ付、井末阿賀崎新田者年々用水不足仕、難義至
極仕候ニ付、去西ノ春一ノ口方二ノ水門迄之川巾広ケ掘浚之義ハ一
ノ口方三ノ水門迄深壹尺通掘浚仕候ニ付、去西年者ケ成ニ用水行届、
立毛相続仕候、然ルニ当年ニ至去西ノ春掘浚不仕内と同様ニ土砂押
込相埋り申候、去西年之義者大造之人足・諸入用相掛り掘浚仕候処、
漸壹ケ年之中ニ元形チニ埋り迷惑至極仕候。夏分用水引取ニ而埋り
候者無是非次第ニ御座候得共、秋末方春迄高瀬船通船為致候故、右
躰并筋大埋りニ罷成申候、其上近年者湊内も夥敷相埋り悪水吐方差
支、裏作出来方相努百姓共迷惑至極仕候、紀伊守様村々たり共冬水
通シ候而者御田地之為不宜義者眼前之義ニ御座候得共、御領主様御
易之筋も有之候歟、井組村々江相談仕候得共、善悪返答不仕、何分阿
賀崎新田村之義ハ用水者手末ニ而差支、冬水ハ悪水溜りへ引請村中

御田地湿地ニ罷成、其上井路掘浚其外諸入用ハ仮高迄ニ相掛り、近年百姓共年増困窮仕候間、一ノ口水門之義用水引取之外者水門ニ置申度奉存候、前書之通高瀬船通船仕候而難義之筋、乍恐ケ条書を以左ニ奉申上候、

一 水門揚卸ニ掛板并芋綱操其外諸道具痛諸入用百姓難義ニ相成候事、
一 高瀬ヲ通候得者、掛板多分取払候ニ付、土砂押込井路埋り候ニ付、掘浚人足百姓難義ニ相成候事、

一 右土砂押込候ニ付、掘浚之土砂捨場無之、遠方江持捨候得者、多分人足相掛候事、

一 夥敷年々土砂押込候ニ付、年々掘浚ハ仕候得共、迎も埋り候程掘浚出来不申候ニ付、用水不足ニ相成、公私共不易之筋ニ相成候事、

一 冬水引候故、阿賀崎新田悪水溜り埋、出水之節差支難義之事、
一 冬水引候故、高瀬通堤筋年々普請所出来仕、時々 公儀御入用御普請も願上候程罷成、公私不易之事、

一 湊内埋り候ニ付、高瀬通シ方阿賀崎新田悪水溜り江落込候水吐兼候ニ付、麦作其外裏毛作一同不作之事、

右七ヶ条之難義難凌、迷惑至極仕候、勿論勝手之筋者毛頭無御座候得共、御城米并板倉周防守様御蔵米之義者是迄之通川下被仰付、商荷物之川下御差留被下候様仕度可存候、当村方差出候水門番給之義、前々八年中之分 公儀方被 下置候処、三十壹年以前辰年万年七郎右衛門様御代官所之節被仰聞候者、一ノ口水門番給之義、苗代水方八月迄者田地用水ニ引取候得者 公儀方御入用被下置候筋ニ候得共、秋末方二月迄ハ用水不用之義ニ候へ八年中之給米ヲ差遣候ハ筋違ニ

候間、当辰方減米申付候段被仰渡、私共方御断申上候ハ高瀬通船不仕候而ハ町場交易之障りニ相成所之不繁昌ニ罷成候間、何分前々通り給米被下置候様願上候得共、町場之為ニ相成候義ニ候ハ、村方方給米差遣候ハ格別用水不用之節水門を切置候共公儀御差支之筋ハ無之候間。番給之義者減米申付候と殿敷御吟味被仰渡、無抛御請申上、村償ニ仕来候、其節迄ハ川筋も深ク御座候ニ付、只今之通り差当り難義仕候程之義も無御座候ニ付、其後は迄通船為致罷過申候、然ル所前書之通、近年川筋并海表大埋りニ罷成、御田地水亡仕、用水者不足仕、旁以不大方難義仕候間、此段乍恐松平紀伊守様御役場へ御掛合被下、当秋方高瀬通船御差留被下候様仕度可存候、勿論前書願上之通相違も被為思召候ハ、乍恐紀伊守様御役人中様御立会之上、川筋御見分被下候ハ、難義之筋分明ニ御座候間、何卒御立会御見分被為下度可存候、依之以書附奉願上候、以上

戊

東作

友左衛門

喜兵衛

倉敷

御役所